

《第 45 号》「落ち葉の堆肥化で、8.5t のごみ減量!!」

横山道子(東京大学環境安全研究センター協力研究員、けやきの会副会長)

東京大学本郷キャンパスでは、およそ 2 万 5 千人の学生・教職員が教育・研究活動を行なっている。1999 年、大学から発生する生活系廃棄物のうち「紙」は 5 種類、「紙以外のごみ」はカート方式で 6 種類に分別し、これまで「ごみ」として処分していたものを資源として再生利用するための分別収集システムを構築した。カートには IC タグをつけ、計量したごみ量を記録し管理している。排出者が自ら出した廃棄物量を把握することは、分別の徹底とごみの発生抑制を実現するためには欠くことができない要素で、ごみ減量に効果をもたらした。

残された課題は毎年構内で 100t 近く発生している落ち葉の資源化であった。落ち葉はすでにカートに分別して集められているが、資源化できず焼却処理してきた。他の品目同様に目指す資源化は「落ち葉の堆肥化」である。これにはたくさんの人手と重労働が必須となる。10 年来参画してきた文京区のごみ減量活動がきっかけとなり広がった「人の和」を中心として、ここに大きな力を結集することができた。堆肥化 10 年以上のキャリアを持つ区立小学校用務主事、共に「ごみ減量啓発誌」を編集してきた仲間、東大の環境サークルの「環境三四郎」のメンバー、さらに市民ボランティアも加わり「東京大学けやきの会」を設立、試行錯誤しながら、初年度の 2010 年には 8.5t の落ち葉を堆肥化して、学内、区立小中学校、市民の希望者に配布した。年間落ち葉発生量の約 1%ではあるが、一歩前進することができた。

廃棄物問題は、人間の快適な生活形態への要求により、自然界では処理できない物質を大量に作り出し、それらを廃棄してきたことにより起因している。さらに加えて資源の枯渇や、さまざまな環境負荷による地球環境に対する影響、廃棄物埋立処分場の逼迫などが生じている。これらは「地域的な問題」として発生したが、地域的な問題にとどまらず空間的な広がりを持ち、「次世代にどこまで環境資源を残せるか」と課題にまで拡大している。同様に、今直面している「放射性廃棄物の処理」についても厳しさを痛感している。

以上